令和５年度年度末自己評価書

令和６年１月　愛南町立城辺小学校

【評価基準】
Ａ：目標を達成　　Ｂ：８割以上達成
Ｃ：６割以上達成　　Ｄ：６割未満

重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	中間期			考察(◆)と改善方策(◇)
1	社会総がかりで取り組む教育	1 地域の人的・物的環境を活用し、家庭や地域と連携した教育を進めている。	教職員	93	A	A	100	A	A	◆肯定率がやや下がってはいるが、たくさんの行事などでの地域人材の活用を進めたことにより、おおむね肯定的に捉えられている。参観日や行事での保護者の参加率が高いことからも、学校と家庭がつながりを深め保護者の学校教育への理解と教職員の保護者理解が進んでいると思われる。 ◇来年度の教育課程を見直す際に、学年ごとに地域と関われる内容がある場合は検討をする。
			児　童							
			保護者	93	A		94	A		
			地域関係者	95	A		98	A		

学校運営協議会委員の所見	○保護者・地域が城辺小学校との関わりを大切にしており、各学年または学校全体で多くの活動を行うことができている。 ○中間期よりもやや肯定率は下がっているが、学校行事等の活動の様子から、むしろ地域とのつながりは深まったと感じている。A判定なので、このままでよいのではないか。 ○今後もより一層学校・家庭・地域が連携を深まるよう努めてほしい。
学校の対応	○各種たよりやＨＰなどで学校運営協議会の存在や活動を地域全体に広め、理解していただけるようにする。 ○教育課程を見直すとともに、地域コーディネーターと連携して人材を発掘・活用することにより、充実した教育活動ができるようにしていく。 ○地域とのつながりを今後も一層深めることができるように、情報発信と情報収集に努める。

2	一人ひとりを見つめ、育てる生徒指導の徹底と健全育成の推進	2 「いじめは絶対に許さない、見逃さない」学校づくりに努める。	教職員	100	A	A	100	A	A	◆教職員・児童・保護者・地域関係者共に高い肯定率であり、中間期よりも肯定率は上がっている。 ◆児童の肯定率は97％と上がってはいるが、そうでない児童が３％いる。今後もいじめの早期発見と解消に努め続ける必要がある。 ◇引き続き、生活アンケートを活用したり、「SOSの出し方・捉え方」を児童に伝えたりすることで、いじめの早期発見に努める。
			児　童	97	A		95	A		
			保護者	96	A		95	A		
			地域関係者	100	A		97	A		
		3 一人ひとりを重視した指導に努めている。	教職員	100	A	A	100	A	A	◆保護者の肯定率が上がり、教職員・保護者ともに高い肯定率である。様々な行事などで児童の姿を見ていただき、学校の取組を認めてもらっていることを感じる。 ◇引き続き、今後も一人ひとりを大切にした教育に努める。
			児　童							
			保護者	98	A		93	A		
			地域関係者							
		4 心を込めた挨拶や優しい言動ができ、規範意識のある児童の育成に努める。	教職員	100	A	A	100	A	A	◆保護者の肯定率は上がっているが、地域の肯定率は大きく下がっている。校内では挨拶運動で挨拶名人を選出したり、登校班での挨拶の様子を調べたりするなど、様々な方法で挨拶がよくなってきた。しかし、アンケートを見ると、地域での挨拶に課題があり、地域での挨拶に物足りなさを感じている地域の方や保護者がいる。校内での挨拶が校外生活にもつながるように、今後も指導と啓発を継続していく必要がある。 ◇高学年が手本となり、地域の方に進んで挨拶できるよう指導していく。そして、大幅に下がっている地域関係者の方の具体的な声を伺い、改善方法を考える。そのためには、元気な声で挨拶ができにくい児童についての共通理解が必要であると考える。元気な声で挨拶ができにくい児童について学校に連絡していただき、協力して児童を育てていきたい。
			児　童	94	A		93	A		
			保護者	93	A		89	B		
			地域関係者	85	B		98	A		
		４の内訳								
		気持ちのよい挨拶ができている。	教職員	100	A					
			児　童	93	A					
			保護者	92	A					
			地域関係者	80	B					
		思いやりのある言動ができている。	教職員	100	A					
			児　童	94	A					
			保護者	93	A					
			地域関係者	90	A					

学校運営協議会委員の所見	○挨拶に関しては、中学生と比べて元気がないと感じる。無理に声を出させる必要はないので、いろいろな手立てを講じ、長い目で指導にあたる必要がある。 ○挨拶以外のことも褒めて自信を持たせ、挨拶につなげていくとよいのではないか。 ○児童会を中心とした挨拶運動は効果が見られるので、今後も工夫しながら継続してもらいたい。 ○学校や地域だけでなく、家庭での挨拶も大切にしてほしい。家庭や地域への啓発とともに、大人からも積極的に声を掛け、大人が手本になるよう努める姿勢も必要であると考える。
学校の対応	○教員、児童会による気持ちのよい挨拶についての啓発を継続する。児童会を中心とした、自主的な挨拶への取組を今後も工夫していく。 ○学級ＰＴＡ活動や参観日等を活用し、家庭での挨拶を啓発していく。 ○元気な挨拶ができにくい児童の目標について地域と共通理解を図る。 ○挨拶以外のことでも褒めることを大切にし、児童が自信を持てるようにする。

【評価基準】
Ａ：目標を達成　　Ｂ：８割以上達成
Ｃ：６割以上達成　　Ｄ：６割未満

重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	中間期			考察(◆)と改善方策(◇)
3	確かな学力、豊かな心、健やかな体を育てる教育の推進	5 授業力の向上（主体的・対話的で深い学び、個に応じた指導、ＩＣＴ活用）を図る。	教職員	100	A	A	100	A	A	◆全体的に高い肯定率である。保護者の肯定率が上がり、A判定となった。教職員の「深い学び」についての理解と研究実践が進んだこと、ＩＣＴの活用が日常的に行われていること、そしてそれらが発信されていることが結果につながったと考えられる。 ◇教職員が「深い学び」と、ＩＣＴのより効果的な活用場面や方法についての研究を継続する。（のびのびの時間にＩＣＴを活用して、個に応じた学びを設定する。）また、３学期はまとめの学期であるので、授業中の個別指導・支援や放課後の補充学習をより充実させ、学習内容の定着に努める。さらに、授業中の児童の様子や成長・変容、学習内容の定着に向けた学校や学級担任の考えや指導方法等についてホームページや学校だより、学年通信等で保護者や地域に発信することも継続する。
			児　童	95	A		94	A		
			保護者	90	A		87	B		
			地域関係者	100	A		100	A		
		6 家庭学習の習慣化に努める。	教職員	100	A	C	100	A	C	◆教職員は高いが、児童、保護者は共に低い肯定率である。多忙な２学期であったため、落ち着いて家庭学習に取り組むことが難しかったことも要因の一つと考えられる。学級の実態に応じて宿題の内容や量が考えられていて、宿題についてはおおむね提出できている。しかし、宿題以外の内容を進んで学習するまでには至っておらず、学年別の家庭学習の目安時間が達成できていないと考えられる。 ◇発達段階に応じた目標時間を意識して家庭学習ができるように、児童や保護者に再度周知する。また、目標時間を考えて宿題を出すよう心掛けるとともに、児童の達成状況を把握するために、家庭学習の内容と時間帯のチェックを行う。あわせて、保護者にも見守りや確認、励ましの声掛けの協力依頼を継続する。さらに、「チャレンジノートの手引き」を有効活用し、自主学習への意識化を図る。
			児　童	71	C		73	C		
			保護者	75	C		74	C		
			地域関係者							
		7 家庭読書の習慣化に努める。	教職員	100	A	C	100	A	C	◆「週に1回以上図書室で本を借りているか」という質問に変更し、児童の肯定率が大幅に上がった。また、親子読書や本の福袋の機会があったことで、保護者の肯定率も上がった。低学年はよく本を借りて読書に親しんでいるが、高学年は行事等の忙しさもあり、なかなか読書時間を増やせないのが現状である。忙しい中でどうやって読書に気持ちを向かわせるかが課題である。 ◇引き続き朝読書を継続し、読書の習慣化を図る。また、宿題として発達段階に合わせた読書の時間を設定する。さらに、親子読書の機会を設定し、保護者にも見守りや確認の協力を依頼する。定期的に読書の日を設定する。
			児　童	69	C		59	D		
			保護者	55	D		42	D		
			地域関係者							
		8 自己の体力向上・健康保持増進に取り組む態度を育成し、「早寝・早起き・朝ごはん」の啓発指導に努める。	教職員	100	A	A	100	A	B	◆肯定率が上昇しており、おおむね肯定的に捉えられている。しかし、早寝・早起き・朝ごはんがまだ十分にできていないと感じている保護者が13%いることから、個に応じた指導や声掛けとともに、家庭への啓発も必要であると考える。 ◇引き続き「外遊び」の奨励に努め、中休みや昼休みに教室で過ごしている児童に積極的に声掛けをする。また、「早寝・早起き・朝ごはん」の状況把握を朝の健康観察時に徹底する。昼休みが長い曜日を設定することも考えられる。さらに、体育科で学習した運動に目標を持って休み時間や家庭で取り組めるような手立てを引き続き工夫する（なわとびがんばりカードの活用など）。
			児　童	90	A		88	B		
			保護者	87	B		87	B		
			地域関係者							

学校運営協議会委員の所見	○各学年の家庭学習の目標時間（低学年30分、中学年45分、高学年60分）を知らない保護者もおり、まずはその周知が必要である。各種たより等で知らせるとよい。 ○宿題の提出はできているので、その内容や出し方の工夫を継続していくとよい。 ○ＩＣＴのよりよい活用や個に応じた学習支援など、学習への意欲が高まる工夫をしてもらいたい。学ぶことが楽しいと感じる経験を低学年からできるようにする必要があると考える。そして、学習内容や学習方法を自分で選んだり考えたりできるようにし、中学校に向けて学習習慣が身に付くようにしていくとよいのではないか。 ○親も子も忙しさはある。双方の負担にならない程度で、親子読書やみきゃん通帳など効果のあったことを継続していくとよいと考える。
学校の対応	○各学級での指導や各種たよりでの紹介、学級ＰＴＡでの話題にするなど、児童、保護者に家庭学習の目標時間の周知に努める。 ○目標時間に適した内容や量になるよう、宿題の出し方を工夫する。 ○２月に家庭学習チェックを１週間実施し、来年度に向けた取組を検討する。 ○親子読書、読書の日を負担にならない程度で、定期的に実施する。

【評価基準】
A：目標を達成　B：８割以上達成
C：６割以上達成　D：６割未満

重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	中間期			考察(◆)と改善方策(◇)
4	地域と連携した安全教育の充実と安全・安心な教育環境の整備	9 家庭や地域、関係諸機関との連携・協力に努める。	教職員	100	A	A	100	A	A	◆全体的に高い肯定率である。行事等で学校、家庭、地域、関係諸機関が関わる機会が多くあったこと、またそのことを各種通信やＨＰなどで発信してきたことにより、情報共有が進んだためであると考えられる。 ◇通学路や学校施設の安全を意識して、定期的な、また日常的な点検を心掛ける。また、保護者や地域へホームページや学校だより等で学校の取組を発信し、地域での児童の様子や環境についての見守り依頼に努める。さらに、登校指導時や学校運営協議会、保護者や地域の方が来校した際等に、積極的に声を掛け、連携・協力を密にして情報収集に努める。
			児　童							
			保護者	99	A		94	A		
			地域関係者	100	A		97	A		
		10 防災教育を日常化させ、主体的に防災学習に取り組む児童の育成に努める。	教職員	100	A	A	100	A	A	◆全体的に高い肯定率である。避難訓練や防災学習への積極的な取組が進んだためと考えられる。特に、「自分の命を守るために安全に気を付けている」という項目で、「当てはまる」と答えた児童の割合が63%から74%と増えており、実践的な学習や訓練の成果が感じられる。 ◇引き続き避難訓練や学級活動を通して児童への防災教育を計画的に進める。また、ショートの避難訓練の実施機会を増やして避難行動の確認を行い、危機意識やスキルを高める。
			児　童	98	A		99	A		
			保護者	98	A		99	A		
			地域関係者	100	A		100	A		

学校運営協議会委員の所見	○災害はいつ起こるか分からないし、想定外のことが起こる可能性が高いので、様々な想定の避難訓練や防災学習を継続してもらいたい。保護者・地域と合同で避難訓練を行う必要もあるのではないか。 ○防災教育で児童が自分の命を守るという考えを身に付けてきているのを感じる。また、防災家族会議など、防災について家族で考える機会ができているのは、防災意識を高めるのに役立っていると考える。 ○防災への意識は高まっているので、防災教育の日常化をしてもらいたい。 ○校区内に倒壊の恐れがある建物も見られるが、地域の方や教員が危険箇所を注意して見守っており、ありがたい。 ○自分で避難場所や避難方法などを考え、行動できるようにするためにも、いろいろなケースを想定した訓練が必要である。引き渡し訓練もぜひやってもらいたい。
学校の対応	○ショート避難訓練の実施を増やし、様々な想定でより実践的な訓練ができるように努める。 ○引き渡し訓練や地域との合同避難訓練など、保護者や地域と連携した訓練ができるよう、計画を進める。 ○防災家族会議等、家族で防災について考える機会をつくり、家庭での防災意識を高める。 ○危険箇所等の情報が得られるように、今後も保護者、地域、関係諸機関との連携に努める。

【評価基準】
A：目標を達成　B：８割以上達成
C：６割以上達成　D：６割未満

重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	中間期			考察(◆)と改善方策(◇)
5	人権・同和教育と特別支援教育の充実	11 差別の現実に学ぶ研修と実践に努める。	教職員	100	A	A	100	A	A	◆教職員・児童・保護者共に高い肯定率である。日々の道徳科や学級活動での指導、人権・同和教育参観日での人権集会や講演などの行事や様々な活動など、いろいろな人との関わりと相手を意識した言動の大切さを学ぶ機会があり、児童に人権意識を育てることができたと考える。学校だより・校長だより・学年だより・ホームページ等で、保護者・地域関係者に定期的に発信できていることも、この結果につながっていると考える。 ◇児童は、時に友達を傷付けてしまう言動を取ることがある。今後も帰りの会などで、自他の言動を振り返る時間を十分に確保し、お互いの人権感覚を磨き合う時間を大切にしていきたい。また、教職員・保護者共に人権感覚を磨き続け、子どもの手本となる姿を見せ続けていきたい。
			児　童	96	A		94	A		
			保護者	97	A		96	A		
			地域関係者							
		12 児童一人一人の教育的ニーズを把握した組織的・継続的な指導・支援に努める。	教職員	100	A	B	100	A	B	◆全体的に高い肯定率である。児童への設問が「困ったときに誰か相談できる人がいるか」と変更したため、児童の肯定率が大きく上がったと思われる。保護者、地域関係者の肯定率も上がっているが、参観日アンケートの意見などからも一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援について理解し、認めていただいているのが感じられる。 ◇児童の肯定率は上がってはいるものの、約10%の児童は悩みを抱え込んでいることが推測できる。今後は、発達段階に応じたＳＯＳの出し方教育を推進し、組織的・継続的な指導・支援に務める。 ◇支援員の研修会を月１回実施し、特別支援学級だけでなく、困り感のある児童への支援も充実させ、より児童一人一人の教育ニーズに適した指導・支援ができるようにしている。
			児　童	88	B		78	C		
			保護者	98	A		93	A		
			地域関係者	100	A		94	A		

学校運営協議会委員の所見	○５-12について児童の肯定率が大きく上がっている。中間期の話合いが生かされ、結果につながっている。 ○学校行事や参観日などの様子から、特別支援学級の児童だけでなく、困り感のある児童への配慮がなされ、児童一人一人が大切にされているのを感じる。 ○肯定率は高いが、児童の約１割は困ったときに相談できる人がいないと答えているので、一人一人に寄り添い、具体的な支援方法を検討していく必要がある。
学校の対応	○今後も、児童の変容を見逃さず、共通理解を図りながら一人一人に寄り添った支援に努めていく。 ○研修を充実させ、教職員の理解と認識が深まるように努めるとともに、困り感のある児童への支援等、より児童一人一人の教育的ニーズに適した指導や支援ができるようにする。

【評価基準】
A：目標を達成　B：８割以上達成
C：６割以上達成　D：６割未満

重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	中間期			考察(◆)と改善方策(◇)
6	教職員の資質・能力の向上	13 校内研修やＯＪＴを通して、資質・能力向上に関する共通理解・共通実践を行っている。	教職員	100	A	A	100	A	A	◆高い肯定率である。研修主任を中心に、授業研究をはじめ、各教員の得意分野を生かした研修など、充実した校内研修を実施することができた。また、機会を生かして児童について共通理解を図り、指導や支援に生かすことができた。日々の活動が資質・能力向上に役立っている。 ◇今後も、継続できるよう、ＯＪＴを大切に、共に学び合う教師集団であり続けたい。
			児　童							
			保護者							
			地域関係者							
		14 個人目標の設定に照らし合わせ、「学び続ける教職員」として自己研鑽に努める。	教職員	95	A	A	100	A	A	◆個々の目標に合わせ、自己研鑽に努めることができている。肯定率が下がったのは、行事など多忙であり、自己研鑽の時間が十分に取れなかったと感じたためと思われる。 ◇目標管理、学級経営案、個人的な目標等、様々な目標を抱えている現状があるため、目標の簡略化や一本化が必要であると考える。また、日々の業務への多忙感があることも事実で、今後行事の精選等を含め、運営協議会で話し合っていきたい。
			児　童							
			保護者							
			地域関係者							

学校運営協議会委員の所見	○高い肯定率になっているのは、教員一人一人が努力している成果だと感じる。 ○教員の意識と能力を高めるための努力がチームでなされている。今後も継続してもらいたい。
学校の対応	○学校運営協議会と連携して協議し、学校行事の精選や地域に協力していただきたいことの実現に努める。 ○今後も学校全体で教職員の資質・能力向上に努めていく。

【評価基準】
Ａ：目標を達成　　Ｂ：８割以上達成
Ｃ：６割以上達成　Ｄ：６割未満

重点目標		目　標	評価者	目標値 肯定90%以上		判定	中間期			考察(◆)と改善方策(◇)
7	業務改善	14 校務支援室システムの活用による、業務改善を図っている。	教職員	95	A	A	100	A	A	◆高い肯定率であるが、肯定率は100%ではない。校務支援システムの活用が業務改善につながっているが、セキュリティーの関係でシステムの使い方に変更があったため、手間を感じた職員もいる。 ◇情報教育主任を中心に、教え合い、学び合いながら新しいシステムにも適応していっているところである。今後も風通しのよい職場環境を継続し、お互いにサポートし合いながらＩＣＴによる効率化に努めたい。 ◇校務支援システム専門部会を通して、システムの改善要望も進めていきたい。
			児　童							
			保護者							
			地域関係者							
		15 働きがいと働きやすさを重視し、業務改善を図っている。	教職員	95	A	A	75	C	C	◆大きく肯定率が向上した。今後も、働きがいを感じられるような業務改善に努めていく必要がある。そのためには、学校行事などの効果と負担を考慮した上で、削っていくものも考えていかなければならないのではないか。 ◆超過勤務時間が長くなっている教職員もおり、心身の健康の維持に課題がある。 ◇劇的に数値が上がっている。２学期はたくさんの行事で、子どもの笑顔が見られる場面が数多くあり、それが教職員の働きがいにつながったことも考えられる。一方でそれを実現した、教職員の超過勤務時間にも目を向け、行事の精選や学校運営協議会を中心とした地域・保護者の皆様によるサポート体制をお願いしたい。
			児　童							
			保護者							
			地域関係者							

学校運営協議会委員の所見	○業務改善の努力をしているのが分かる。働きやすいと思える教員が増えると、今後教員志望の人も増えるのではないか。 ○継続してＰＤＣＡサイクルを回し、改善に努めてほしい。
学校の対応	○学校行事等の教育効果ややりがいについて検討し、業務の効率化・改善に努める。 ○ＰＤＣＡサイクルを継続し、働きやすさの改善に努める。